令和元年度（2019 年度）

尚絅大学・尚絅大学短期大学部
国際交流活動報告書

目　次

1.「令和元年度（2019 年度）尚絅大学･尚絅大学短期大学部　国際交流活動報告書」発行にあたって

2. 活動実施内容

3.海外協定校の紹介

4.海外協定校への派遣事業
(1)相互研修旅行
①慈済大学（台湾）2019 年 9 月
②Southern University College（マレーシア）2020 年 2 月
(2)短期語学留学
Southern University College（マレーシア）2020 年 8 月
(3)交換留学
①慈済大学（台湾）2018-2019
②仁徳大学校（韓国）2018-2019
③2019-2020 派遣予定学生の紹介

5.海外協定校からの受入事業
(1)短期語学留学
慈済大学（台湾）2019 年 7 月
(2)交換留学
①2019 年度の交換留学受け入れ状況
②留学生アクティビティ
③留学生の活動

6. おわりに

１．「令和元年度（2019 年度）尚絅大学・尚絅大学短期大学部　国際交流活動報告書」発行にあたって

尚絅学園の「全学グランドデザイン」では、尚絅大学における教育・研究目標を「智と徳を兼ね備え自律的に学修を続ける女性を育成し、基礎的・応用的研究を推進して成果を発信し、地域社会に貢献する」とし、国際化に関しては「教育研究の国際化を促進するために、海外の教育研究動向に目を向け、海外の諸機関と提携して相互の研究成果を交換し、共同研究を実施し、教員および学生の交流を推進する」としています。
このようなグランドデザインで示された国際化の目標を柱に据え、様々な異文化体験を通じて、長期ビジョンにおける学園の目指すべき姿（将来像）の中の「学園が求める学生像」で示されている、「自律的、主体的に行動し、グローバル化で活躍できる人材」の育成を目指し、尚絅大学・尚絅大学短期大学部における国際交流活動を実施しています。

尚絅大学・尚絅大学短期大学部では、これまで、語学研修だけではなく、現地の学生との交流や共同活動も組み込むことで、実践的な語学力と国際社会でも通用するようなコミュニケーション能力の向上を目指し、国際交流活動に取り組んできました。具体的には、台湾・韓国・中国といった、主に東アジアの大学との間で交流協定を締結し、交換留学、短期語学留学、相互研修旅行を実施してきました。本年度からはマレーシア（Southern University College）が加わり、地域・言語についての拡大を図っています。

本活動報告書は、本年度の国際交流関係活動実施内容の概要、海外交流協定校の紹介のほか、本年度の事業について、学生によるレポート・報告書やアンケート結果など、具体的な内容を含めてまとめています。

なお、尚絅大学・尚絅大学短期大学部における国際交流活動については、令和2年（2020 年）1月までは国際交流委員会が担当してきましたが、令和2年（2020 年）2月から、新たに設置された「グローバル化推進センター」及び「グローバル化推進委員会」が所管することとなりました。今後の国際交流活動については、急速にグローバル化する現代社会に対応するとともに大学全体の国際通用力を高めるために、海外の協定大学等との協力により、大学全体の教育のグローバル化を牽引していく役割についても担うものと考えています。

尚絅大学・尚絅大学短期大学部
令和元年度（2019 年度）国際交流委員会委員長　桑原芳哉
（現代文化学部・文化言語学部　学部長）

２．活動実施内容

2019 年 4 月 16 日　前期交換留学生歓迎会

2019 年 6 月 1 日　前期留学生アクティビティ（バス 1 日旅行・阿蘇方面）

2019 年 7 月 8 日～27 日　短期語学留学の受入（台湾・慈済大）

2019 年 8 月 7 日　前期留学生送別会

2019 年 9 月 1 日～17 日　Southern University College（マレーシア）に短期語学留学

2019 年 9 月 9 日～14 日　相互研修旅行（台北、花蓮・慈済大）

2019 年 9 月 26 日　後期交換留学生歓迎会

2019 年 11 月 16 日　後期留学生アクティビティ（バス 1 日旅行・南阿蘇、高森方面）

2020 年 1 月 31 日　後期交換留学生送別会

2020 年 2 月 19 日～　相互研修旅行（シンガポール、マレーシア・Southern University College）

2020 年 2 月～（1 年間）　交換留学出発（台湾・慈済大）

（注）新型コロナウイルス感染拡大の影響により、上海杉達学院、Southern University College への交換留学は出発延期、春期休暇中の短期語学留学（慈済大）は中止となった。

３．海外協定校の紹介（協定締結順）

慈済大学（台湾）2011 年学部間協定、2014 年大学間協定締結

慈済大学は、1994 年「慈済医学院」として創設、2000 年慈済大学に改称、台湾の風光明媚な観光地として知られている花蓮市に位置しており、医学院・生命科学院・人文社会学院を併設する総合大学である。ボランティアを主な活動とする仏教系の大学でもあり、東日本大震災での活躍は日本国内でも高い評価を得ている。

仁徳大学校（韓国）2014 年大学間協定締結

仁徳大学校は、1962 年に仁徳芸術工科専門大学を経て、2012 年に仁徳大学校に校名変更したキリスト系の学校。実務型教育を特徴とし、韓国文教部から4年連続で「教育力量強化優秀大学」に選定されている。学生数は、約 7，000 人である。

高雄大学（台湾）2019 年 2 月大学間協定締結

高雄大学は学生数約 5200 人、2000 年創設の新しい国立大学で、人文社会系（日本語専攻含む）、法学系、管理学系、理学系、工学系等を有す総合大学である。大学が位置する高雄市は熊本県・熊本市の姉妹都市であり、県内自治体、経済界の交流が盛んな地域である。

上海杉達学院（中国）2019 年 2 月大学間協定締結

上海杉達学院は学生数約 1 万人、上海市の浦東新区にある中国の私立大学である。1992 年に創設された中国では比較的新しい大学である。文系を中心とした総合大学で、外国語系（日本語専攻含む）、観光・旅行系、経済系、マネジメント系、ファッション系など実学系の学科が多い。

Southern University College（マレーシア）
（南方大学学院）2019 年 2 月大学間協定締結締結

Southern University College は学生数約 2,600 人、マレーシアの第二の都市ジョホールバル（シンガポールの対岸）に位置する私立大学である。1990 年設立の Southern College（南方学院）を経て、2012 年 Southern University College に昇格している。現在、人文・社会系、商業管理学系、芸術・デザイン系、中国医学・薬学系等 5 学部を有す。マレーシア初の華人系の大学で、学生は中国系が多いが、中国文学以外の授業の多くは英語で行われている。

済州大学校（韓国）2020 年大学間協定締結締結予定

済州大学校は、1951 年済州大学の母体として創設された。1962 年には国立大学となり、12 学部 59 学科、9 つの大学院を持つ総合大学である。さらに、2005 年には国際交流本部が設置され、海外の大学などとの学生プログラム（交換留学、International Summer School、短期韓国語韓国研修プログラム）を実施している。外国人留学生へのサポートも厚く、安心して留学することができる大学である。

【各協定校との交流内容と条件】

留学先	国・言語	交換留学			短期語学留学			研修旅行		
		対象	期間	費用	対象	期間	費用	対象	期間	費用
慈済大学	台湾 中国語	大学2名まで	半年～1年	学費・寮費免除	全学生（大学・短期大学部）	4週間 春季休暇中	15万円程度	全学生（大学・短期大学部）	6日間程度 夏季休暇中 （台湾・韓国の隔年開催）	6万円程度
仁徳大学校	韓国 韓国語	大学３名まで		学費免除			15万円程度			
高雄大学	台湾 中国語	大学２名まで		学費・寮費免除						
上海杉達学院	中国 中国語	大学2名まで		学費・寮費免除	全学生（大学・短期大学部）	2週間 夏季休暇中 （予定）	15万円程度	全学生（大学・短期大学部）	6日間程度 春季休暇中 （中国・マレーシアの隔年開催）	6万円程度
Southern Univ. （南方大学学院）	マレーシア 英語	大学2名まで		学費免除			20万円程度			10万円程度
済州大学校	韓国 韓国語	大学3名まで		学費免除			15万円程度		6日間程度 夏季休暇中 （台湾・韓国の隔年開催）	6万円程度

４．海外協定校への派遣事業

(1)相互研修旅行

①慈済大学

【台北、花蓮・慈済大学 2019 年 9 月 9 日(月)～9 月 14 日(土)】

	日付	発着地	時間	交通機関	内容	宿泊
1	9.9(月)	福岡→台湾桃園国際空港→台北	10:50-12:30	CI111 便	福岡空港集合。中華航空 111 便にて台湾桃園国際空港へ。 着後、周辺散策。台北の夜市体験	VIP ホテル
2	9.10(火)	台北→花蓮	午前発、昼頃着 午後	電車	着後、交流会、キャンパス見学	チャーミングシティホテル花蓮
3	9.11(水)	花蓮	終日	バス	花蓮でフィールドワーク	チャーミングシティホテル花蓮
4	9.12(木)	花蓮→台北	午前発、昼頃着	電車	台北市内散策	VIP ホテル
5	9.13(金)	台北	終日	地下鉄	台北の歴史フィールドワーク(迪化街など)	VIP ホテル
6	9.14(土)	台北→台湾桃園国際空港→福岡	16:45-20:00	CI116 便	中華航空 116 便にて福岡へ 福岡空港着後、現地解散	

【参加学生】 7 名

文化言語学部 2 名、現代文化学部 3 名、幼児教育学科 1 名、食物栄養学科 1 名

【引率教員】 北口英穂准教授

【費用】(学生分)合計約 8 万円

旅費:70,000 円(往復航空券、燃油サーチャージ、空港税、台北 3 泊、花蓮 2 泊、台北花蓮往復電車代込)

【その他】

台北の地下鉄移動 500 円程度　食費:1 食 500 円程度　海外旅行保険:5,000 円程度

研修旅行の2つの課題

○【花蓮】テーマ「台湾・花蓮に残る『日本』」(9 月 11 日)

合同フィールドワーク

調査先:花蓮市内の松園、慶修院、鉄路博物館、文創園区

調査方法:

(ア)グループ毎で 1 つ調査先を決めて、事前に関連情報を収集しておく。

(イ)台湾の歴史について講義＋収集した情報を共有する。

(ウ)実際現地を訪問し、現地学生の意見も聞きながら、感想をまとめる。

(エ)帰国後、グループ毎でレポート作成。

○【台北】テーマ「台北の古い街散策:迪化街(てきかがい)」(9 月 13 日)

自分の足で歩き、台湾(迪化街)の歴史・文化に関する場所を見つける。

調査先:霞海城隍廟、大稲埕慈聖宮、迪化街の建築(複数)、阿媽的家

調査方法:

(ア)グループ毎で 1 つ調査先を決めて、事前に関連情報を収集しておく。

(イ)台湾の歴史について講義＋収集した情報を共有する。

(ウ)実際現地を訪問し、感想をまとめる。

(エ)帰国後、グループ毎でレポート作成。

参加学生によるレポート(抜粋)

「台湾・花蓮に残る『日本』」

現代文化学部 1 年野口莉那、幼児教育学科 1 年藏岡夏実

〈調査対象:慶修院(花蓮市)〉

慶修院は 1917 年、川端満二という日本人布教師が建設した仏寺である。慶修院は、日本人が建設したのだと一目でわかる日本的な造りで、日本の仏寺に欠かせない手水舎や鐘もあった。調べてみると、日本政府の植民政策で移住してきたに日本人が、慶修院をよりどころにしていたらしい。慣れない土地に来た日本人が安心できるようにという思いから、まるで日本にいるかのような仏寺を作ったのだろうと感じた。他にも、不動明王像や弘法大師像、四国八十八か所も並んでいた。絵馬も置いてあり、たくさんの願い事が書かれていた。

少し奥に入ったところに、当時の写真が壁一面に飾られていた。役場や学校、田んぼの様子が写っており、日本人が慶修院周辺をどんどん開拓していた様子が伝わってきた。そのすぐそばの休息所では浴衣体験ができ、外には風鈴が綺麗に飾られていて、日本を感じた。

このフィールドワークで慶修院に訪れて花蓮と日本との強いつながりを感じた。この研修に参加するまで花蓮という名前どころか、日本が台湾を植民地として開拓していたことすら知らなかった。慈済大学の生徒は、小学生の時に慶修院に訪れたことがあり、今回が二回目だという。台湾では小学校の授業の一環として教えられるほど重要なことだと実感した。慶修院だけでなく台湾全体が日本のもので溢れていて、海外に来た感じがあまりしないほどだった。日本に植民地されていたにも関わらず、それほどまで日本のものを多く取り入れ、私たち日本人にとても親切にしてくれることに台湾人の偉大さを感じた。

また、慈済大学の生徒と合同で行けたことで、慶修院の施設内で一緒に写真を撮ったり、手水舎などを中国語で何というか教えてもらったりと交流するきっかけを作ることができた。

今回、慈済大学との合同フィールドワークという形で慶修院に行けたことで、たくさんのことを学び、経験することができた。このような素晴らしい機会を与えてくださった方々全ての人に感謝し、生かしていこうと思う。

「台北の古い街散策：迪化街（てきかがい）」

現代文化学部 2 年高瀬芙希子、同 2 年畑野萌

〈調査対象：迪化街の建造物〉

今回の研修旅行中に「台北の古い街散策：迪化街(てきかがい)」とテーマを定め、散策を行った。迪化街とは、台北の淡水河の東岸にある台湾最大の商店街・問屋街だ。ほとんどの建物はレンガ造りを主としており、レトロな雰囲気を感じさせるものであった。域内の約 370 棟のうち 178 棟が歴史的建造物で、200 棟は建物の 1 階部分を店舗として使用している。南京西路から涼州街まで全長 600m の道に、乾物・漢方薬・お茶・布類などの問屋が並んでいた。昔ながらの乾物屋や漢方薬屋も多く立ち並んでいるが、近年古い街並み、建造物を生かした町おこしが展開され、レトロな喫茶店や雑貨屋が多く見受けられた。世界各国に存在するスターバックスもこの迪化街の街並みの中ではレンガ造りの荘厳な雰囲気を漂わせていた。ビルが立ち並ぶ現代の風景はあまりなく、散策しているだけで少し前の時代へタイムスリップしたかのような気分になる場所だった。

（感想）

私は今回が初めての海外旅行でした。研修旅行なので事前に調べたり中国語の復習をしたりなど事前にできることは頑張りましたが、それでも現地でちゃんとできるだろうか、何かトラブルが発生してしまったらどうしようと不安な気持ちがありました。しかし実際に台湾に到着してみると現地の方や慈済大学の学生の皆さんがとても優しく、一緒に研修旅行に行った仲間とも協力して過ごすことができ、とても楽しく学びの多い研修旅行となりました。

事前に調べたところを見て回ったこともとても勉強になりましたが、1 番印象に残っているのは買い物をしたときです。慈済大学の学生の方と一緒にいる時はサポートをしてもらいましたが、それ以外は自分でコミュニケーションを取らなくてはならないので大変でした。特に最初の数回は現地のスピードに慣れておらず大変でしたが、徐々に慣れていくことができました。最初はメニューを見て「这个」としか言えなかったけれど最終日にはメニューの名前を言って注文出来たのがとても嬉しかったです。(畑野)

私自身としては高校時代の修学旅行以来二回目の台湾だったが、前回は訪れていない花蓮なども回り、貴重な六日間だったと思う。台湾という異国の地ではあったが、街には日本で目にしたことがある店や物もあり、外から見る日本を感じられた。日本とそう離れている訳でもなく同じアジア圏内の台湾は、似ている文化もあれば異なったり全く馴染みが無かったりする文化もあり、異文化理解を肌で感じられたと思う。二日間の交流を行った慈済大学の学生はとても温かく歓迎してくれた。学校内での交流や一緒にご飯を食べたり夜市を回る中で親睦を深めながら普段勉強している中国語の実践の場にもなり、今後の学習への意欲に繋がった。

今回の研修旅行は東アジアの歴史や文化、中国語にさらに興味が湧いた非常に有意義な時間になったと思う。（高瀬）

②Southern University College

【マレーシア、Southern University College　2020 年 2 月 19 日（水）～2 月 25 日（火）】

行先：シンガポール、マレーシア・ジョホールバル（南方学院大）、クアラルンプール

日時：2020 年 2 月 19 日（水）～2 月 25 日（火）　6 泊 7 日（うち機内 1 泊）

目的：異文化理解の促進、協定校との交流促進

参加学生：全学科、現代文化学部、生活科学部の計 9 名が参加

引率教員：黄蘊准教授

	日付	内容
1	2.19（水）	福岡―ホーチミン経由―シンガポール
2	2.20（木）	シンガポールにてアジア博物館、チャイナタウンなど文化施設の見学
3	2.21（金）	午前中　シンガポールからマレーシア・ジョホールバルへ移動 午後　Southern Univ（南方学院大）にて交流会、ジョホールバル文化遺産見学
4	2.22（土）	ジョホールバルからクアラルンプールへ　移動 着後、ホテル周辺の散策
5	2.23（日）	クアラルンプールのモスクなど宗教施設の見学、異文化探索
6	2.24（月）	午前中　クアラルンプール見学 午後　移動　クアラルンプール―ホーチミンかバンコク経由―福岡
7	2.25（火）	早朝着

<u>今回の研修旅行の独自性、収穫</u>

〇イスラム教、イスラーム建築に対する理解が得られた点

幸か不幸かイスラム教、イスラム教徒に対する誤解、偏見が多いのが 21 世紀に入ってからの現代社会の風潮といえる。シンガポールもそうだが、マレーシアはイスラム教徒の多い国である。今回の研修旅行で、マレー人のガイドからモスク、イスラム教に関する説明を聞いたり、モスクに入ったりするといったまたとない経験をした。そうしたことを通して、研修旅行に参加した学生はイスラム教に対して具体的な認識を抱くことができ、異文化・異宗教に対する理解を深めた。

〇マレーシアのニョニャ文化に触れることができた点

マレーシアとシンガポールに、マレー人と中国人の混血という特殊なコミュニティが歴史的に存在し、彼らはババ、ニョニャと呼ばれている。ニョニャは女性のことで、彼女たちは独特なニョニャ料理という料理のジャンルを作り上げ、またマレーでもない中華でもない独自のニョニャ衣装というスタイルを創出している。今回の研修旅行において、ニョニャ料理体験、またニョニャ衣装の試着体験をすることができた。参加学生は実際にニョニャ料理の漬け物、お菓子を作る体験をした。料理を作ることを通して、ニョニャの世界観を体験し、貴重な異文化実践を行った。

参加学生によるレポート（抜粋）

「シンガポール・マレーシア研修旅行感想文」

文化言語学部４年　直塚茉優

シンガポールとマレーシアは、今回初めて行きました。以前、台湾や北京、韓国に行ったことがあるのですが、それぞれの国で雰囲気や食事などが違い、改めて海外旅行は楽しいと感じました。

シンガポールでは、マーライオン、マリーナベイサンズ、クーンセンロードなどをまわりました。マリーナベイサンズでは展望台まで登り、景色を楽しみました。シンガポールを一望する中で、貿易船の多さに驚きました。

また、シンガポールで泊まったホテルがインド人街だったため、インド料理やインドの方と交流もでき、シンガポールだけではなくインドの雰囲気も体験することができました。

マレーシアは、ジョホールバルとクアラルンプールに行きましたが、マレーシア内でも地域により雰囲気が違うなと感じました。ジョホールバルでは南方大学の学生と交流でき、とても楽しかったです。人にもよるかもしれませんが、日本の大学生とあまり変わらない感覚で、ファッションなどの話もしたりして、とても良い時間を過ごすことができました。

クアラルンプールに移動後は、ホテル近くのチャイナタウンやガイドの方の案内で観光地をまわるなどしてクアラルンプールを満喫できました。また、モスクを訪れてみて、神秘的で落ち着いた雰囲気がとても素敵でした。今までの経験も含め、各国の宗教施設の外観やルールの違いなどを見て、もっと様々な場所へ見に行きたいと思いました。

言語に関しては、中国語を使えるだろうと思っていたのですが、シンガポールとクアラルンプールでは英語の方が主流で少し苦戦しました。ジョホールバルでは中国語の方が通じるなど、地域によって異なることがわかりました。さらに、公共施設や観光施設では多国籍の人々が働いており、英語の方が多く使われていることがわかりました。シンガポール人、マレーシア人ともに英語や中国語、マレー語など何カ国語も話せる方が多く、驚きとともに尊敬します。

帰国の際は、飛行機の遅延などハプニングも多かったのですが、無事に終了でき、よかったです。

大学生活最後に貴重な体験をすることができました。この研修旅行ご協力してくださった黄先生をはじめとする大学の関係者の皆様、本当にありがとうございました。

「シンガポール・マレーシア研修旅行報告書」

文化言語学部 4 年　玉田　悠

今回の研修旅行で、2 泊 3 日でシンガポール、3 泊 4 日でマレーシアに滞在することができた。私はシンガポールもマレーシアも初訪問であったため、研修中は毎日のように刺激を感じられた。

シンガポールもマレーシアも、日本と比較すると建築物や気温、国民性などの面で大きな差を見つけられた。観光地を周るたび、変わる街並みに多民族国家であることを体感することができた。また、シンガポールに滞在中は宿泊ホテルがインド人街にあったため、シンガポールにいながらもインド人と交流し、インド料理を嗜むという異国感を味わいつつ、不思議な感情に浸っていた。しかしアラブストリートに行けば風景がガラッと変わり、今回の研修旅行で初めてモスクを目の前に見ることができた。マレーシアでも外に出れば多宗教に触れることができ、以前から個人的にイスラム教の身なりに興味があったため、スカーフを現地の方に選んでもらい、巻いてもらうことができた。宗教上、身なりやマナー、食事など私達が知らないような気を付けなければならない場面が多くあり、知識をもっと身につけたいと思った。それ以外にも、シンガポールとマレーシアで歴史博物館に行った際、理解が難しい箇所が多くあったため、帰国後に自身で再度調べる必要があると強く思った。

また、今回の研修旅行で中でも印象深かったことは、国民性についてである。これまで大学生活中に、留学や旅行で海外に行く機会が多くあり、数え切れない程の多国籍の人々と交流した。外国にもかかわらず、どこに行っても人の温かさに触れることができた。そして今回の研修でも、日本語、中国語、英語を活用して会話をしたり、さらに交流を経て新たな友人をつくることもできた。多くの人と交流していくうちに、フレンドリーらしさや朗らかな印象を受けた。話をしていて、とても心地良いと感じる場面が多々あり、海外で生活をしていてあまり感じられないような、珍しい感情があった。そのおかげもあって研修中は終始笑顔でいられた。

個人的に今回の研修旅行を通してシンガポール・マレーシアに対する知識を得られたため、次回は協定校同士の交流に主軸を置き、今後の大学間における発展を期待している。

「シンガポール・マレーシア研修旅行報告書」

現代文化学部　2 年　山下歩

研修旅行は、2 月 19 日から 25 日でシンガポールとマレーシアを訪れた。現地は、2 月の日本とは真逆で日中 30 度を超える暑さであった。7 日間の研修旅行で多民族国家ならではの雰囲気を色濃く感じることができた。両国の民族構成は主にマレー系・中華系・インド系が大半を占めている。そのため、空港や街中では

マレー語・中国語・英語が飛び交っていた。さらに、3 日目に行った南方大学の学生との交流では、殆ど英語でコミュニケーションをとったが、彼らはマレー語・中国語・英語の 3 ヶ国語を話すことができると聞いて驚いた。日本で暮していれば、日常で日本語以外の言語を話す機会は少ないので国同士の違いを実感した。

宗教の面でも、複数の宗教が信仰されていることから多民族国家であることがうかがえた。マレーシアの首都クアラルンプールでは仏教寺院、イスラム教のモスク、ヒンドゥー教の聖地や寺院などが混在していた。シンガポールとマレーシアでモスクやバドゥ洞窟、仏教寺院などを見学して、見るだけで気分が晴れるような華

やかで煌びやかな様がとても印象に残っている。日本の仏教寺院ではあまり見られない様であったが、街中に並ぶ大量のお供物用の花を見ると熱心な信仰心を感じることができた。イスラム教の国立モスクを見学した際には観光客用のガウンを着て髪の毛を隠す必要があったり、写真を撮るときにはポーズを取ってはいけなかったりとイスラム教独自のルールを体験できた。

今回初めてマレーシアとシンガポールを訪れ、新型コロナウイルスの影響で直前にスケジュールの変動があったり、飛行機の便が変更になったりとなにかと戸惑いの多い研修旅行であった。しかし、現地学生との交流や様々な施設見学、中華料理とマレー料理の特徴を合わせ持つニョニャ料理作りなどの体験を通して異文化に触れ、語学面でも良い刺激を受け、多民族・多宗教が共存する様子を学ぶことができ非常に充実した研修旅行であった。

(2)短期語学留学

Southern University College（マレーシア）

【マレーシア、Southern University College　2019 年 8 月】

1. 行先：Southern University College（マレーシア・ジョホールバル）

2. 日時：2019 年 9 月 1 日（日）～9 月 18 日（水）　約 2 週間

3. 目的：Southern University College での英語学習（参加人数によってクラス数設定）、及び各種体験と現地学生との交流活動

【2019 年度短期語学留学（英語）in Southern Univ.スケジュール】

第 1 週：9/1-9/7

<table>
<tr><th></th><th>9/1（日）</th><th>9/2（月）</th><th>9/3(火)</th><th>9/4(水)</th><th>9/5(木)</th><th>9/6(金)</th><th>9/7(土)</th></tr>
<tr><td>09:00～09:50</td><td rowspan="6">9/1
福岡⇒
シンガポール
シンガポール泊</td><td rowspan="5">シンガポール⇒
Southern Univ.（ジョホールバル）

始業式
キャンパスツアー</td><td colspan="4" rowspan="3">英語授業</td><td rowspan="6">小旅行
（マラッカ
1 泊 2 日）</td></tr>
<tr><td>10:10～11:00</td></tr>
<tr><td>11:10～12:00</td></tr>
<tr><td>12:00～14:00</td><td colspan="4">昼休み</td></tr>
<tr><td>14:30～16:30</td><td>言語パートナー交流会</td><td>マレー文化体験</td><td>自由行動</td><td>マレー文化体験</td></tr>
<tr><td>16:30～</td><td colspan="5">自由行動</td></tr>
</table>

第 2 週：9/8-9/14

<table>
<tr><th></th><th>9/8（日）</th><th>9/9（月）</th><th>9/10(火)</th><th>9/11(水)</th><th>9/12(木)</th><th>9/13(金)</th><th>9/14(土)</th></tr>
<tr><td>09:00～09:50</td><td rowspan="4">小旅行
（マラッカ 1 泊 2 日）</td><td colspan="5" rowspan="3">英語授業</td><td rowspan="4">文化体験</td></tr>
<tr><td>10:10～11:00</td></tr>
<tr><td>11:10～12:00</td></tr>
<tr><td>12:00～14:00</td><td colspan="5">昼休み</td></tr>
</table>

14:30～16:30		インド文化体験	自由行動	インド文化体験	自由行動	中華文化について	
16:30～		自由行動					

第 3 週:9/15-9/18

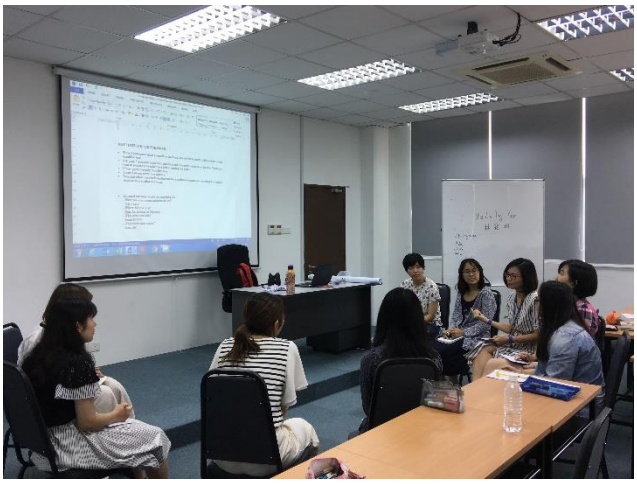
	9/15（日）	9/16（月）	9/17(火)	9/18(水)
09:00～09:50	自由行動（市内散策）	成果報告会 終業式	ジョホールバル⇒シンガポール	福岡着（現地解散）
10:10～11:00				
11:10～12:00				
12:00～14:00		昼休み		
14:30～16:30		自由行動		
16:30～		自由行動	シンガポール⇒福岡へ（深夜便）	

実施状況

予定どおり 9 月 1 日（日）～9 月 17 日（火）にかけ、マレーシアの協定校 Southern University College（以下 Southern Univ.）で短期語学留学を実施した。英語の授業、マレーシア文化に関する体験型授業を中心に活動した。参加者は文化言語学部・現代文化学部、生活科学部、及び幼児教育学科の学生 5 名だった。

9 月 2 日（月）にシンガポールで半日見学し、当日午後にマレーシアのジョホール州に位置する Southern Univ. に到着した。9 月 3 日（火）から 9 月 16 日（月）までの約 2 週間の間に、現地の学生も交わるかたちで英語の授業を受けたり、またマレーシアの多様なエスニック・グループの文化を学ぶ体験型の授業を受けたりした。授業以外に、マラッカに小旅行に出かけたり、現地の学生と交流を行いながら、マレーシアの多様な食文化、宗教などに触れることができ、多彩な経験をすることができた。

今回は本学の新規の協定校である Southern Univ.への初めての短期語学留学となったが、参加学生からは英会話を長時間実践できたほか、多民族国家マレーシアの多様な文化に直に触れることができ、とても新鮮で刺激的であるという感想がよせられた。



参加学生による調査報告書（抜粋）

今回の短期語学留学に際し、参加学生が各自テーマを決めて、現地でフィールドワークなどを行い、最後に調査報告書をまとめるという課題を課していた。以下一部の調査報告書を掲載する。

「日本とマレーシアの英語の授業の違い」

現代文化学部1年　中村真歩

1.　テーマ設定の背景と狙い

今、オリンピックやラグビーなどで外国人が日本にたくさん訪れている。それに伴い、小学生から英語教育が始まる。しかし、学校で英語を学んでも英語力はあまり高くないように思える。EF の調査によると、日本の英語能力は、88ヶ国中49位、アジアの中では21ヶ国中11位と低い。一方、マレーシアは88ヶ国中22位、アジアの中では21ヶ国中3位と高い。このことから、英語教育に違いがあるのではないかと思い、調査することにした。

2.　調査方法

実際に授業を受けて日本とマレーシアで授業のやり方を比べる。

3.　調査結果

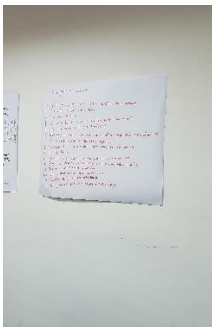
(1)　日本の英語教育

日本では日本人の英語の先生が文法や単語などを日本語で教えることが多い。また、ALT（外国語指導助手）とよばれる、先生が英語を教えることもある。ALT の先生は外国語を母語としているのでネイティブの発音を学ぶことができる。しかし、文部科学省が行った「小学校等における英語教育実施状況調査（平成30年度）」によると、19336校の学校を対象に調査した結果、ALT の活用状況は小学校が13044人、中学校が8019人、高校が2794人と高校にいくにつれて少なくなっている。また、英語担当教師の英語使用状況は、発話の半分以上を英語で行っているのは中学校が約60％、高校が約40～50％とこれも高校のほうが低くなっている。このことから、学年が上がるにつれて英語を聞いたり話したりする時間が減っていくことがわかった。また、外国人と接する機会もすくないため、英語を使う機会が少ない。さらに、大学生になると英語科などの学部じゃない学部は、英語を勉強する時間がもっと少なくなる。このことから、年齢が上がるにつれて英語を学ぶ機会が減ってきていることがわかった。

(2)　マレーシアの英語教育

マレーシアの英語の授業では先生も生徒も英語しか使わない。そのため、必然的に英語を話す機会が増える。

また、テキストもすべて英語で書いてある。それから、日本のように先生の説明を聞くだけではなく、班に分かれて話し合いをしてそれを発表するという授業が多かった。はじめに先生が話し合うことのテーマを示して、何人かの班に分け、班に 1 枚ずつ模造紙を配る。生徒は話し合いをしながら模造紙に話し合ったことを書いていく。話し合った後に、模造紙をはって話し合った内容を発表する。



日本の英語の授業ではこのような活動はないように思える。これが日本とマレーシアの英語教育の違いではないだろうか。

4.　考察

今回の調査で日本人の英語能力が低いのは、英語を話したりする機会が少ないからだということが分かった。確かに、今まで学校で受けた英語の授業を思い出しても、マレーシアのように英語を使う機会は少なかったように思える。しかし、学校によっては外国人の先生がいて、外国人の先生から英語を学べる所もある。私が高校の時通っていた学校には英語特進コースというコースがあり、外国人の先生が3人ほどいた。また、プレゼンテーション英語の授業の時間は、その外国人の先生だけでするのでマレーシアの英語の授業のように、授業はすべて英語で行っていた。それから、英語で議論することもあり、授業内容はマレーシアと似ていた。そのため、今回の留学で英語の授業を初めて受けたとき、戸惑いはなかった。また、最後にレポートを書いてプレゼンテーションをするときも、高校でやり方を学んでいたので終わった後に、英語の先生から良いプレゼンテーションだったと言われた。このことからも、日本の英語の授業でもっと英語を話す時間を作るべきだということが分かる。もちろん、文法を教えることも大事である。しかし、今回の留学で、英語を毎日聞いて話すことが英語能力を向上させるには必要なことだなと改めて感じた。これからの日本には英語を話せる人が必要になってくる。そのためには、まず、英語教育の見直しが必要なのではないだろうか。

「マレーシアの料理文化について」

生活科学部2年　奥田桃子

2019 年 9 月 2 日から 9 月 17 日まで、マレーシアのジョホールバルにある南方大学学院に短期留学に行った。

マレーシアは東南アジアの中心に位置している。人口は約 3000 万人の国家であり、マレー系、中華系、インド系など様々な国民からなる多民族国家である。マレーシアにはこのようにたくさんの民族が暮らしているため、食事の種類も豊富であった。私はマレーシアの食事について興味を持ったので、それについて書こうと思う。

マレーシアの料理は大きく分けてマレー系、中華系、インド系、中華系とマレー系が合わさったニョニャ料理があった。これはやはり、マレーシアが多民族国家であるからだと考えられる。

代表的なマレー料理に、「ナシラマ」という料理があった。ナシラマは、ココナッツが香るごはんと、日本のいりこのような小魚やピーナッツ、サンバルという辛いソース、キュウリや卵がトッピングされた料理である。朝ごはんとして学校の売店で買ったナシラマは紙とバナナの葉で三角形の形にくるまれて販売してあった。他にも、マラッカで

はココナッツのスムージーや、ラクサなどのココナッツを使用した料理がたくさんあり、ココナッツがマレーシア料理には欠かせないものだということがわかる。

中華系の料理にはチキンライスなどがあった。日本のチキンライスとは違い、ゆでた鶏肉とそのゆで汁で炊いたごはんを盛り付けた料理で、ごま油の香るタレがかかっていた。チキンライスにも場所によって違いがあり、マラッカのチキンライスはごはんがボールのように小さく握られていた。それぞれの場所で同じ料理でも違っていておもしろいと思った。

インド系の料理には「ロティティシュ」「ロティチャナイ」と呼ばれる代表的な料理があった。ロティティシュは薄く焼かれたパイのようにサクサクの食感で、砂糖で甘く味付けされたスイーツのようなものであり、お店により大きさも違い、1 メートルくらいあるような大きなものもあった。また、ロティチャナイは薄くのばした小麦粉の生地を折りたたんで焼いたもので、カレーをつけて食べるものであり、中の具として卵や玉ねぎ、バナナなどたくさんの種類があった。ロティチャナイはマレーシアに滞在中一番食べた現地の料理で、特にバナナ入りの「ロティピサン」はバナナの甘味があり、特においしかった料理であった。

ニョニャ料理（中華系プラナカン料理）とは、父系祖の中華料理の食材、調理器具、食器を使い、母系祖のマレー人家庭に伝わる香辛料や味付けでアレンジした料理をさす。中華系移民男性と現地のマレー系女性が結婚し互いの食文化が交差したことで生まれた料理である。見た目は中華料理のようであったが、ココナッツの甘味などマレー系の料理の味を感じることができた。

このようにマレーシアにはたくさんの料理があった。それぞれの民族料理やそれらが融合した料理など、違った料理を楽しむことができた。栄養の面からみると、サラダなど野菜をとる機会が日本に比べると少なかったため、現地の人はどのようにしてその栄養を補っているのかが一つ疑問に残った。次回またマレーシアを訪れる機会があれば、この疑問の解決に向けて取り組んでみたいと思う。

「マレーシアの魅力について」

幼児教育学科 2 年 野中七海

私は 2019 年 9 月 1 日から 2 週間、マレーシアでの短期留学を経験した。その中で、いつかマレーシアに移住してみたいと思える程多くの魅力を感じることが出来た。

私は本来マレーシアの保育園、幼稚園での保育について実際に見学等を通して学び、それを調査報告書にまとめる予定であったが、諸事情により幼稚園見学が実現しなかったため、現地の学生や職員から伺ったマレーシアの情報を元に、私が感じたマレーシアの魅力について記述したいと思う。

まず、基本的なマレーシアの情報として、マレーシアは主にマレー系、インド系、中華系の 3 民族からなる多民族国家である。滞在していた都市ジョホールバルはマレー人が治めており、この人物は市民からは親しみを込めて「king」と呼ばれている。この時、マレー人以外の民族でそのことに対して不満を抱くことがないか気になったが、現地の学生いわく、中華系は商業に長けているため適材適所でこの町は動いているとのことだった。このように自身の民族や文化の在り方を深く理解し、アイデンティティを持つと共に、自身のものではない文化や民族性をも理解、許容しているところが、多民族国家で暮らす人々の最も魅力的な長所であると感じた。

このような事例などから私が第一に感じたマレーシアの魅力は、国民が他者や外国人に対してとても寛容であるということである。それは常に異なる文化を持った民族と共に生活してきたことが要因のように思う。例えば日本は異文化や外国人に対して排他的であるように感じる。外国人に威圧感を感じたりして、逆に見下すような人も少なからずいるように思う。それは日本人が、日本人の力でこの小さな島国を大きく発展させてきたことへのプライドを持っているだけでなく、自分たちと異なる文化を持った人々と生活する機会がなかったことからマスメディアによる情報だけを鵜呑みにし、外国人を得体の知れない存在であると認識していることが原因になっているように感じる。また、現代では同じ日本人であっても必要以上に関わりを持とうとせず、交流を億劫だと思ったりして興味を持とうとしない人が増えているため、外国人との交流などもってのほかないのである。私はこれらが現代の日本人の課題であると考える。他人に干渉されることなく過ごせる方が良いと思う人も勿論いるだろうが、少なくとも私は外国人である私達に対してもしっかりと話を聞こうとしてくれたり、もてなそうと親切にしてくれたりする現地の方々の温かさに居心地の良さを感じた。

次に、マレーシアの人々は空間と時間を大切にしているように思う。飲食店や、私が滞在していた南方学院大学などでは外やテラスにたくさんの椅子や机が設置してあり、人々は屋外で食事や会話を楽しんでいた。また夜の飲食店では家族連れもとても多く、毎週開催されるナイトマーケットも賑わい、まさに空間と時間を大切にした生活を送られているように感じた。開いた空間は、それだけで開放感を感じる。その中で、気さくな店員と関わり、家族や友達と話をしながらのんびりと夜の時間を過ごすことは、発展途上国ならではの楽しみ方ではあるかもしれないが、もし日本でもそのような空間が普通に存在しているなら、普段窮屈さを感じながら生活する日本人の、いこいの場所になりうると考える。

次に、多民族国家であるため、国民が複数の言語を話すことができることに魅力を感じた。中華系の大学である南方学院大学では、多くの学生が母語である中国語、マレー語、英語の 3 カ国後を用いてコミュニケーションを

とる。ほぼ全員が幼児期からマレー語と英語の教育を受けるとのことだった。日本人は早い人は幼児期から、多くは小学校や中学校から英語学習を開始する。しかし日常会話で扱えるほどスピーキング力が伸びないことが課題とされている。それはなぜか、マレーシア人の生活を知ると一目瞭然であった。単刀直入に言えば、日本では英語を話せなくても生活ができるからである。マレーシア人は中華系の場合、店先では公用語であるマレー語、家族や友人同士では中国語、授業では英語を用いて会話をする。複数の言語を持つことは、マレーシアで生活する上で必要なスキルなのである。日本で暮らす日本人で、そのような危機感を持って英語学習をする人がどのくらいいるのか確実な数は分からないが、少ないことは確かである。ただ日本はこのままだと全体のスピーキング力が向上することは永久にないのではないかと日本の将来を案じた。

次に、子育て家庭を支援する制度が整っていることに魅力を感じた。マレーシアは発展途上国であるため、老人より子どもが多い国家である。それもあり、政府は子育て支援に積極的である。マレーシアは物価も安く、家族と過ごす時間も多く取れるため、子育てをする親にとっては最善の環境であると感じる。

これらのことから、マレーシアはたくさんの魅力がある国家であると分かった。今回の留学では英語学習だけでなく、人の温かさ、異文化交流の楽しさを十分に感じることができ、何にも変え難い経験とすることができたと感じる。移住しなくとも、マレーシアは私にとって何度でも訪れたいと思える、もうひとつの故郷のような存在となった。

(3)交換留学

①慈済大学

【台湾、慈済大学東方語文学系】

・派遣人数　1 名

・期間　2018 年 9 月～2019 年 6 月

・留学生名

　白木里奈（文化言語学部 2 年～3 年、派遣期間 1 年）

参加学生による最終報告書（抜粋）

文化言語学部 3 年白木里奈

専攻について

東方語文学系の中文専攻と日文専攻の授業を履修できますが、中国語のみの中文専攻は難しく、日文専攻の授業を多く履修しました。日文専攻の授業は全部が中国語ではない為、来た当初中国語が全く分からなかった私にとってはすごく有難い授業でした。単位互換が可能な教科を中心に、慈済大の先生と相談し履修する教科を決めました。

外国語学習について

留学期間中は週に2回午前中3時間語学センターの授業を受けていました。来た当初の時は語学センターの授業があったのでとても助かりました。最初は挨拶程度しか理解できなかったのですが、基礎から勉強していくことにより、理解が深まりましたし、基礎がしっかりしました。他の外国人の留学生とも交流ができたのですごく楽しかったです。担当の先生もすごく親切でテストが終わった後はクラスメイト全員をランチに連れて行ってくれたりしてくださいました。

寮生活について

私は寮に住むのも初めてだったので、家族以外の誰かと住むこと自体に初めは抵抗がありました。部屋に仕切りもなくプライベートな空間がないのが最初はきつかったです。しかし、約 9 カ月寮で生活しましたが、住んでいくうちに慣れました。そして私の部屋は現地の学生が 1 人同室でした。彼女は日本語が上手でしたので日常は日本語と中国語で会話していました。授業で分からないところやテストがある時はお互い質問をしていました。また、私はよく自炊をしていました。寮にはキッチンがないので共有スペースで電気鍋を使って料理をしていました。他の学生も自炊をしていました。冷蔵庫もありましたが、みんな使うのでいつも物であふれていました。

その他

私は台湾滞在中に台湾のたくさんの地域に足を向けることを心がけていました。ほとんど一人で旅行し、たくさんの場所に行き、有名な食べ物を食べました。また、午後は基本授業がなかったので自転車で花蓮市中心部まで行き、花蓮の有名な観光地や、カフェに行っていました。花蓮はすごくのどかな街でどこか熊本に似ていたので居心地がよかったです。ですが、留学となるともう少し都会のほうに留学をしたかったという願望もありました。その為、私はよく台北に遊びに行っていました。一人で電車に乗っても迷わなくなりましたし、一人でたくさんの場所に行くことにより語学を使う機会も増えました。

後輩に向けて

大学の授業では当然現地の学生が固まっている為話しかけづらいです。私は勇気がなく話かけることができなかったので勇気を持って話かけたほうがいいと思います。今思うと私は最初の挨拶が大事だったなと思います。

来た当初、クラスメイトの前で自己紹介をしたのですが、中国語が話せないのが気になりすごく緊張してしまい、不安の表情でした。その為、表情が強張っていたと思います。他の外国人の学生を見ると中国語は話せないけどとても元気に挨拶をしていました。それを見て第一印象は大事だなと感じました。また教室であったら必ず笑顔で挨拶することもしたほうがいいと思います。

全体を通した感想

私は慈済大学に約 9 カ月留学し、花蓮に住んで日本では体験できないことをできました。私は台湾にいると外国人です。日本でも外国人を嫌う人はいると思います。実際に私の母も外国人が日本に住んでいることを怖いと言っています。その為外国人に親切ではない人もいると思います。またその逆で外国人に親切な人もいます。それは台湾でも同じで、私はそのどちらの対応も受けました。不親切にされた時はすごくショックでした。なぜそのような扱いを受けるのかさえも分かっていませんでした。留学をしていくうちにそれは分かりました。台湾は親日な国と聞いていたので、誰もが親切と思っている私の考えが浅はかであったと留学を通して知ることができました。このような経験をしてすごく辛かったですが、海外に住むことによって経験ができたことだと実感しました。親切にされることも多かったです。特に観光地ではほとんどの人が親切でした。私はよく観光地を訪れていましたが、日本と比較し、自由な国と感じました。店員が仕事中に携帯を触っていたり、たくさんの人が地面にそのまま座っていたりと、日本にはない自由さが台湾にはありました。日本ではありえないと思うことが台湾にはたくさんあり、私にとって魅力的な国でした。日本人はよく人の目を気にし、人に迷惑をかけないようにするのが一般的ですが、台湾人はあまり人の目を気にしないです。その為、ファッションに気を使っている人も少ないですし、暑かったら誰でも短パンを履いていました。また留学生である私に困ったことはないかと細目に連絡をくれる先生や、いつも気にかけてくれるルームメイトは、迷惑をかけるのは普通だし、あたりまえと言っていました。それが留学中に一番驚いたことでした。

そして、私が台湾に留学して一番感じたことは、言葉のニュアンスが全く違うところです。特に台湾では、何事にもはっきり言わないと伝わらないと実感しました。日本語みたいに遠回しに言うと伝わらないことが多いなと自分自身で感じたので、はっきり言ったほうがいいと思いました。日本でははっきり言うと嫌われやすいですが、台湾だとはっきり言ったほうがいいみたいです。また、台湾に行くと言葉が通じず、コミュニケーションツールが全くない状況になり、言語は大切ということを身に染みて感じました。話したいのに話せないもどかしさや、話せないからいいやと諦め、中国語を話すのがきつい時期がありました。そのような経験があったからこそ、今日本語を話せる有難さに気づくことができました。流暢に日本語が話せるのに使わないのはもったいないと思います。だから日本語というコミュニケーションツールを使ってたくさんの人と交流をしていきたいなと感じました。ここには書ききれませんでしたが、日本にいたら気づけなかったことがたくさんありました。留学を通して中国語を学ぶだけでなく、このように貴重な体験ができて良かったです。

②仁徳大学校

【韓国、仁徳大学校　2018-2019】

・派遣人数　3 名

・期間　2018 年 9 月～2019 年 6 月（1 年留学）

　　2018 年 9 月～2018 年 2 月（6 ヶ月留学）

・留学生名

　川上紗央莉（文化言語学部 2 年～3 年、派遣期間 1 年）

　涌田鈴音　（文化言語学部 2 年～3 年、派遣期間 1 年）

　中田優花　（文化言語学部 3 年、派遣期間 6 か月）

仁徳大学校は、ソウル市北部にある都市型大学で、在学生数は約 7,000 名です。韓国の大学は 3 月と 9 月から学期が始まり、3 名は秋学期より交換留学生として当大学に留学しました。授業を受けた学科は、ビジネス観光学科とビジネス日本語学科で、主に観光学と日韓両語を扱う授業を受講しました。授業は主に韓国語で行われ、学友との会話も韓国語ですが、3 名の留学生はベストを尽くし、優秀な成績で留学を終えました。また、3 名の留学生は、韓国語能力試験(TOPIC)の上級レベルに合格しました。以下、感想文の一部を紹介します。

文化言語学部3年涌田鈴音

「・・・韓国の伝統文化体験にも参加しました。学生サークル主催の行事で、外国人の学生を対象にした韓国の伝統的な遊び、韓服・テコンドー服体験、書道、クイズなどいろいろな体験が準備されていました。私たちの他に、中国、フランスなどからの学生が参加していらっしゃいました。韓国の伝統的な遊びを体験するのは初めてだったのでとても貴重な体験となりました。また、テコンドーのユニフォームも着ることが出来て嬉しかったです。思い出に残った伝統文化体験でした。学習面では、授業での発表に向けての準備をしている時間が多かったです。PPT を作成したり、台本を作ったりなど作業時間が長かったです。授業は以前よりも余裕が出てきて復習の時間を多く設けました。来月の11日から21日にかけて最後の試験があるので、今のうちからしっかりと学習内容の理解を深めておこうと思います。」

③2019-2020 派遣予定学生の紹介

「慈済大学」(台湾)　　現代文化学部　井野凪沙　派遣期間:3 年前後期

私は中国語サークルの活動などで台湾や上海からの留学生と交流するうちに、東アジアの文化に興味を持ちました。特に強く留学したいと思ったきっかけは、1 年生の時に参加した上海への研修旅行です。中国人にあまり良い印象を持っていませんでしたが、上海杉達学院の学生との交流を通じて、それまでのイメージが一変しました。知らないことは恥ずかしく、恐ろしいことだと思いました。そのことをきっかけに、海外に行き現地の文化や歴史、価値観に深く触れたいと思うようになりました。

慈済大学での 1 年間の留学を通じ言語習得はもちろん、現地の人々との交流を積極的に行いたいと思います。帰国後は日本と台湾の架け橋になれるように頑張ります。

「上海杉達学院」(中国)　　現代文化学部　高瀬芙希子　派遣期間:3 年後期

私は中国語サークルでの留学生との交流や上海研修旅行での経験などで、中国語と異文化交流の面白さに気が付くようになりました。また、大学の授業を通じ、日本と中国の観光についても興味を持ち、両国の架け橋になれるようになりたいと思うようになりました。そのためには、語学力、観光に関する知識、異文化理解力などが求められると考え、留学を決意しました。

留学中は、中国語の力を伸ばすことはもちろん、観光や旅行に関する科目も積極的に履修したいと思います。中国のホテル事情についても学びたいと思います。また、中国人や他の留学生との交流を通じ、視野を広げていきたいと思います。

現代文化学部　松岡あかり　派遣期間:3 年後期

私はよく観光に行くのですが、その先々で訪日外国人観光客に対する親切な対応を見る機会があります。言葉の壁を超え相手の立場に寄り添い、精いっぱいのおもてなしをする仕事は素晴らしいと憧れを持つようになりました。将来はこのような観光の仕事に就き、日本と世界の架け橋になりたいと思っています。そのためには外国語の力、異文化理解の力をつけることが必要になるため、留学を決意しました。

留学を通じ、中国理解を深め、観光・旅行業について学びたいと思っています。中国語を学び、サークルなどに参加し、現地の学生と積極的に交流を深めていきたいです。

「Southern University College」(マレーシア)　　現代文化学部　猪本妃依　派遣期間:3 年前後期

高校時代に 1 週間の英語圏でのホームステイの経験をした際、初めてネイティブの会話に触れ驚きを覚えたことがきっかけで、大学では留学したいと思っていました。耳に入るすべてが英語という場に自分がいることで、英語を使うことがより日常的になる毎日を送りたいです。東南アジアでは日本語学習者も多く、日本語教師の夢に近づくための経験も積めると思っています。

留学中は英語の実践的な能力を高めたいです。また、同時に英語だけではなく、マレー語や中国語にもチャレンジしたり、日本文化とマレーシア文化の比較したりして、異文化理解を深めたいです。

注) 上海杉達学院及び Southern University College に派遣予定の 3 名については、新型コロナウイルスの影響により 2021 年 2 月～の予定となりました。

5. 海外協定校からの受入事業

(1)2019 年度短期語学留学プログラム　「日本語研修 in 熊本・尚絅大学」

日程:2019 年 7 月 9 日(火)～7 月 26 日(金)
参加校と参加人数:慈済大学(台湾)18 名
開講クラス:1 クラス(初中級程度)
授業内容:
午前 日本語授業(専任含む)。
午後 週 1 回程度の特別授業(専任)、茶道体験(週 1 回)、各種交流活動、自由時間等。

第 1 週

	7/8(月)	7/9(火)	7/10(水)	7/11(木)	7/12(金)	7/13(土)	7/14(日)
1 09:00～ 09:50	各地→熊本 如蘭学寮着 11:20 福岡 空　港　着 BR106 14：30 頃 如蘭学寮着	交流会 9:45～ 11:15 昼食: 11:30～	日本語(鶴田)	日本語(畠山)	日本語(山川)	日本語(山川)	小旅行
2 10:00～ 10:50			日本語(鶴田)	日本語(畠山)	日本語(山川)	日本語(山川)	
3 11:00～ 11:50			日本語(鶴田)	日本語(畠山)	日本語(山川)	日本語(山川)	
午後		熊本市内探索 12:30～ 16:00 頃	13:00～14:30 1 講 学生交流(福永)	着付け体験・購入@茶室	13:00～16:00 茶道(下城) @茶室	自由行動	

第 2 週

	7/15(月) 祝日	7/16(火)	7/17(水)	7/18(木)	7/19(金)	7/20(土)	7/21(日)
1 09:00～ 09:50	自由行動	日本語(鶴田)	日本語(鶴田)	旅館業体験@黒川温泉		日本語(畠山)	自由行動
2 10:00～ 10:50		日本語(鶴田)	日本語(鶴田)			日本語(畠山)	
3 11:00～ 11:50		日本語(鶴田)	日本語(鶴田)			日本語(畠山)	

午後		13:00～16:00 茶道@茶室	13:00～14:30 1講 学生交流(福永)		自由行動	

第 3 週

	7/22(月)	7/23(火)	7/24(水)	7/25(木)	7/26(金)	7/27(土)	7/28(日)
1 09:00～ 09:50	日本語(鶴田)	日本語(鶴田)	日本語(鶴田)	日本語(畠山)	日本語(山川)	帰国 8:00 出発 12:20 福岡空港発 BR105	
2 10:00～ 10:50	日本語(鶴田)	日本語(鶴田)	日本語(鶴田)	日本語(畠山)	日本語(山川)		
3 11:00～ 11:50	日本語(鶴田)	日本語(鶴田)	日本語(鶴田)	日本語(畠山)	日本語(山川) 成果発表 修了式		
午後	自由行動	13:00～16:00 茶道@茶室	13:00～14:30 1講 学生交流(福永)	自由行動	自由行動		

【小旅行について(荒尾、植木)】

7 月 14 日(日)

9:00 武蔵ヶ丘キャンパス⇒ 10:00 頃万田坑着

11:00 万田坑⇒ 11:15 宮崎兄弟生家

12:00 宮崎兄弟生家⇒ 12:30 ホテルヴェルデ昼食

13:30 ホテルヴェルデ⇒植木・吉次園 14:30 果物狩り

15:30 吉次園⇒ 16:30 武蔵ヶ丘キャンパス

【旅館業体験@黒川温泉について】

短期語学留学受入中の学生、交換留学生、及び現代文化学部学生が黒川温泉の旅館での 1 日インターンシップに参加し、観光業の中でも実態がよく知られていない旅館業を体験することで、「観光」についての理解を深めることを目的とする。

7 月 11 日(木)午後 黒川温泉と取り組みについての説明

7 月 16 日(火)午後 直前指導

7 月 18 日(木)11 時頃出発、13 時頃黒川温泉着

全体説明、旅館業の説明・見学、黒川温泉の「おもてなし」体験

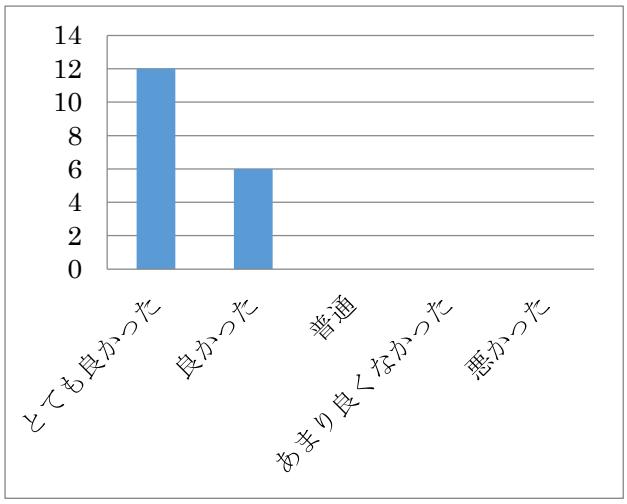
7 月 19 日(金)午前、全体で黒川温泉の「良かった点」「改善してほしい点」等を共有、

昼食後 13 時頃出発、15 時頃武蔵ヶ丘キャンパス着

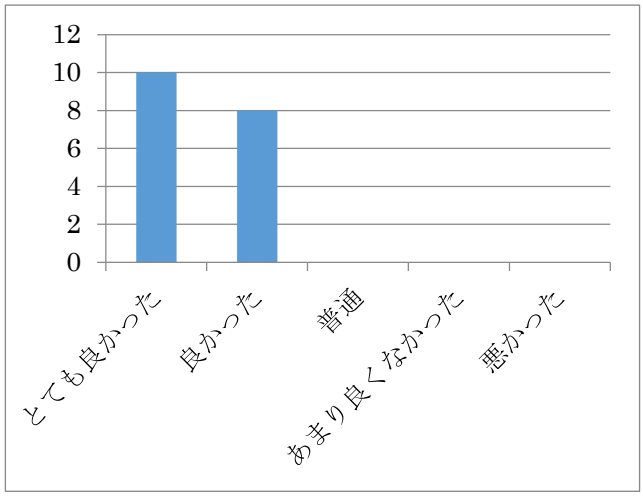
7 月 20 日(土)午前 振り返り

【参加者の感想】アンケート結果から抜粋

全体の感想



日本語の授業はどうでしたか



・授業が分かりやすく、我慢強く教えてくれた。生活用語もいれてくれた

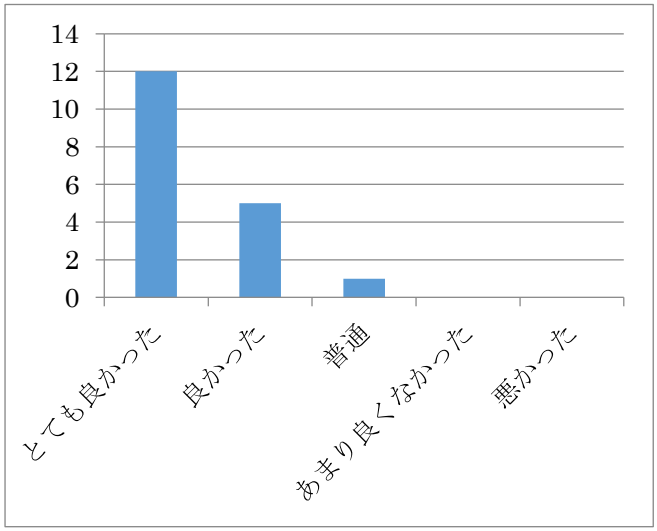
・日本や熊本の美味しいもの、楽しい文化を理解し、多くの新しい単語を覚えた

・先生は真剣に授業してくれた。

・授業の雰囲気が良く、楽しかった

・内容が実用的だった

午後の活動は全体的にどうでしたか



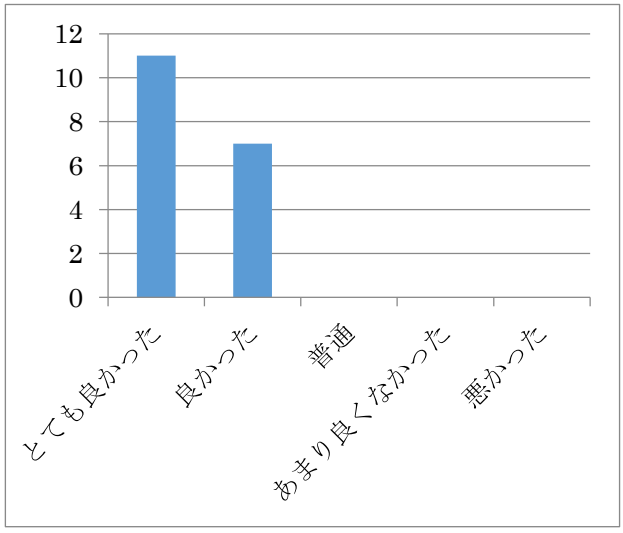
・多くの体験ができた

・日本人学生との交流が楽しかった

・日本文化の体験がよかった

・充実していた

茶道体験はどうでしたか



・先生の教え方がとても丁寧だった

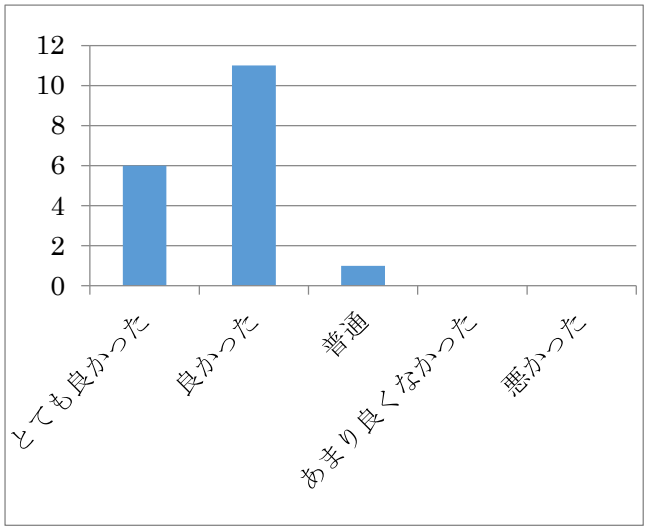
・先生が可愛い

・お菓子もお茶もとても美味しかった

・日本文化、芸術を理解できた

・足が痛かった(多数)けれど…これも思い出

寮の生活は全体的にどうでしたか



・快適だった
・洗濯機があってよかった
・門限が少しはやかった
・舎監がとてもよかった（多数）
・日本人の生活が体験できた
・部屋の大きさはちょうどよかった
・バス停も近く、コスモスなどがあって便利だった
・食堂のおばさんが親切（多数）
・お風呂が気持ちよかった（ちょっと恥ずかしかったけれど）（多数）
・隣の部屋の音が聞こえた
・日本人と一緒に点呼取るのが面白かった
・エアコンが無料のところ
・みんな良い人だった

今回で 4 回目の実施だが、いずれも好評を得ており、今回も全体的に大きな問題は無く、概ね満足していただけたことがうかがえる。今回は新たな試みとして、外国人観光客が多く訪れる黒川温泉での観光と温泉旅館の職場見学を行ったが、おもてなしを「する側」と「される側」両面を体験し、日本の観光文化と温泉旅館の就業の可能性について理解を深めることができたと思う。

(2)交換留学

①2019 年度の交換留学受け入れ状況

（前期）

慈済大学（台湾）:2 名（前年度から継続）

仁徳大学校（韓国）:3 名

（後期）

慈済大学（台湾）:1 名

仁徳大学校（韓国）:2 名

上海杉達学院（中国）:2 名

②留学生アクティビティ

【前期交換留学生向けアクティビティ】

11 月 10 日（土）に本学交換留学生向けアクティビティとしてバス旅行を実施した。交換留学生 5 名と本学現代文化学部の学生等が参加した。

今回は熊本の歴史と文化に触れることをテーマとして、金峰山、峠の茶屋公園、雲厳禅寺、霊厳洞を見学した。夏目漱石ゆかりの峠の茶屋公園、江戸時代初期の剣術家宮本武蔵ゆかりの雲厳禅寺などを見学したことによって、留学生をはじめ、今回のアクティビティに参加した学生たちは、熊本の歴史、文化に対する理解が深まった。また、これを機に、留学生と日本人学生間の交流も一層図られ、親睦を深めることができた。

【後期交換留学生向けアクティビティ】

2019 年 11 月 16 日（土）に本学交換留学生向けアクティビティとしてバス旅行を実施した。交換留学生 5 名と本学現代文化学部の学生等が参加した。当日はまずかぶと岩展望所、阿蘇神社、白川水源を見学し、その後トロッコ列車に乗り、最後に高森湧水トンネルを見学した。阿蘇、南阿蘇地域の観光スポットを回ったことにより、阿蘇地域の文化に触れられ、秋の阿蘇の風景も満喫した。また、留学生、在学生同士の交流も促進された様子で、有意義なバス旅行となった。

⑤留学生の活動

【2019 年度尚絅大学現代文化学部外国語スピーチコンテスト】

11 月 23 日（土）、本学尚絅祭初日のイベントとして、現代文化学部主催外国語スピーチコンテストを行ったが、日本語部門に交換留学生も参加した。

【熊本県内の国際交流イベントにおける本学留学生の活躍】

〈熊本留学生交流推進会議主催ウェルカムパーティ（秋）〉

令和元年10月19日（土）に熊本留学生交流推進会議主催ウェルカムパーティ（秋）が熊本大学工学部百周年記念館で開催され、本学から後期留学生5名（台湾1名、中国2名、韓国2名）とスタッフとして事務職員 1 名が参加した。

冒頭の留学生代表挨拶では本学の代表として姜　明志（韓国・仁徳大学校）が日本語でスピーチを行った。

今回のパーティでは留学生参加者153名、スタッフ62名、総勢215名が参加し、県内の各大学の留学生が交流を深めた。

〈多文化共生留学生シンポジウム〉

令和元年 12 月 7 日（土）に熊本市国際交流会館で多文化共生留学生シンポジウムが開催され、本学から後期留学生 3 名（台湾 1 名、中国 2 名）とスタッフとして事務職員 1 名が参加した。

シンポジウムでは「留学生に聞いてみよう！～私の熊本観～」をテーマとし、県内の留学生が熊本の好きな場所やイメージを自分の体験に基づき、発表した。

本学からは江　詠欣（台湾・慈済大学）、 陳　瑜（中国・上海杉達学院）、蒋　子琪（中国・上海杉達学院）が熊本をテーマに 3 名でグループ発表を行った。

また、発表後には餅つき体験があり、留学生が日本の文化に触れる良い機会となった。

〈菊池郡菊陽町花立地区「餅つき炊き出し行事」〉

本行事は、住民の親睦を図り、災害時における共同炊き出しの技術を向上させるため、2014年から始まった菊陽町花立地域のイベントで、本学に交換留学中の５名の留学生が参加した。参加したのは仁徳大学校（韓国）の学生２名、慈済大学（台湾）の学生2名、上達大学（中国）の学生1名である。

留学生は、日本の伝統的な餅つきをし、餡子もちを作って集まった地域の子ども達に配膳した。

実施日時　　：令和2年1月19日（日）　　09:00～12:00
場所　　：花立コミュニティーセンター（菊池郡菊陽町）
内容　　：花立地区の行事である新年の持ちつき及び炊き出しの手伝い
参加者　　：現代文化学部・文化言語学部　留学生5名

〈『ひのくに』原稿執筆〉

熊本留学生交流推進会議が発行している『留学生交流ひのくに』の「留学生紹介」コーナーに、韓国・仁徳大学校から本学に交換留学として派遣されていた朴佳絃さんの記事が掲載されました。以下、その記事（日本語）を紹介する。

「私は韓国の仁徳大学から来たビジネス日本語学科１年生パクガヒョンと申します。
私が交換留学を申し込んだ理由は昔から他国に暮らしながら勉強をしてみたいと思っていたからです。
交換留学に日本を選んだ理由は高校の時から日本語を学んで来たし、また、日本語を学ぶことが楽しかったので日本を選びました。そして、高校の時友達がおすすめしてくれたハイキューというアニメーションが本当に面白くて日本語にもっと興味を持つことができました。私が留学生活をしてみて思ったことは、海外に留学してみるのは本当に良いことだと思います。なぜなら自分の国だけではなく他国の教育方式についてもしることができますし、長く他国に暮らしながら習える文化もあって良いと思うからです。」（原文ママ）

６．おわりに

今年度はこれまでの慈済大学、仁徳大学校に加えて、新たに上海杉達学院、Southern University College、高雄大学と交流がスタートした。夏季休暇中の Southern University College への短期語学留学（英語）は新たなチャレンジだったが、複数の学科から学生が参加するなどこれまでにない動きがあった。また、慈済大学からの短期語学留学の受け入れでは、訪日観光客で沸く黒川温泉に訪問し、これからのグローカルな活動に可能性を感じることができた。交換留学の受け入れでは、新たに上海杉達学院から２名の交換留学生を迎えることができ、新しい空気を感じられた。交換留学の派遣は、これまでの後期スタートを半年遅らせ年度末の２月頃出発の予定だったが、慈済大学への派遣を除き、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け延期することになってしまった。春期休暇中の短期語学留学（台湾・慈済大）は中止することになってしまったが、この春休みから短期、交換留学と日本を飛び出す予定だった学生たちの気持ちを考えると、残念でならない。

新型コロナウイルスの影響は新年度を迎えても続く可能性があるが、特に国際交流活動へのマイナスの影響は大きい。新年度は新たに済州大学校（韓国）との交流もスタートし、本学の国際交流も新たな体制でスタートすることになるが、協定校とは緊密な連携を維持し、偏った情報に踊らされることなく、冷静に対応することが重要になる。困難な状況だが、大学の国際交流の在り方を見直す好機と捉え、今後の更なる発展につながっていくことを期待したい。

尚絅大学・尚絅大学短期大学部
令和元年度（2019 年度）現代文化学部国際交流委員会委員長　北口英穂
（現代文化学部・文化言語学部　准教授）